

旅なかま

REJSEKAMMERATEN

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

かわいいそうなヨハンネスは、おとうさんがひどくわずらって、きょうあすも知れないほどでしたから、もうかなしみのなかにしずみきっていました。せまいへやのなかには、ふたりのほかに人もいません。テーブルの上のランプは、いまにも消えそうにまばたきしていて、よるももうだいぶふけていました。

「ヨハンネスや、おまえはいいむすこだった。」と、病人のおとうさんはいいました。

「だから、世の中へでも、神さまがきつと、なにかをよくしてくださるよ。」

そういって、やさしい目でじつとみながら、ふかいたため息をひとつつくと、それなり息をひきとりました。それはまるでねむっているようでした。でも、ヨハンネスは泣かずにいられません、この子はもう、この世の中に、父親もなければ、母親もないし、男のきょうだいも、女のきょうだいもないのです。かわいいそうなヨハンネス。ヨハンネスは、寝台のまえにひざをつけて、死んだおとうさんの手にほおずりして、しよっぱい涙をとめどなくながしていました。そのうち、いつか目がくつついて、寝台のかたい脚にあたまをおしつけたなり、ぐっすり寝こんでしまいました。

寝ているうちに、ヨハンネスは、ふしぎな夢をみました。お日さまとお月さまがおり

て来て*礼拝をするところをみました。それから、なくなつたおとうさんが、またげんきで、たつしやで、いつもほんとうにうれいときするようなわらい声をきかせました。ながい、うつくしい髪の毛の上に、金のかんむりをかぶつたうつくしいむすめが、ヨハンネスに手をさしのべました。するとおとうさんが「ごらん、なんといいおよめさんをおまえはもらったのだろう。これこそ世界じゆうふたりとないうつくしいひとだ。」といいました。おや、とおもうとたん、ヨハンネスは目がさめました。うつくしい夢はかげもかたちもなく、おとうさんは死んで、つめたくなつて、寝台にねていました。たれひとりそこにはいません。なんてかわいそうなヨハンネス。

*ヨセフまたひとつ夢をみてこれをその兄弟に述べていいけるは我また夢をみたるに日と月と十一の星われを拝せりと。(創世記三七ノ九)

次の週に、死人はお墓の下にうまりました。ヨハンネスはびつたり棺かんにつきそつて行ききました。これなりもう、あれほどやさしくしてくださいとおとうさんの顔をみることはできなくなるのです。棺の上にはらばら土のかたまりの落ちていく音を、ヨハンネスはききました。いよいよおしまいに、棺の片はしがちらつとみえました。そのせつな、ひとすくい土がかかると、それもふさがつてしまいました。みているうち、いまにも胸がちぎれそ



うに、かなしみがこみあげて来ました。まわりでうたうさんび歌がいかにもうつくしくきこえました。きくうちヨハannesは、目のなかに涙がわきだして来ました。で、泣きたいだけ泣くと、かえって心持がはつきりして来ました。お日さまが、みどりぶかい木立こたちの上に晴ればれとかがやいて、それは「ヨハannes、そんなにかなしんでばかりいることはな

いよ。まあ、青青とうつくしい空をごらん。おまえのとうさんも、あの高い所にいて、どうかこのさきおまえがいつもしあわせでいられるよう、神さまにおねがいでいるところなのだよ。」と、いつているようでした。「ああ、ぼく、あくまでいい人になろう。」と、ヨハannesはいいました。「そうすれば、また天国でおとうさんにあうことになるし、あえたら、どんなにたのしいことだろう。そのときは、どんなにたくさん、話すことがあるだろう、そうして、おとうさんから、ずいぶんいろいろのことをおしえてもらえるだろう。天国のりっぱな所もたくさんみせてもらえるだろう。それは生きているとき、地の上の話を、たんとおとうさんはしてくださったものだった。ああ、それはどんなにたのしいことになるだろうな。」

ヨハannesは、こうはつきりとじぶんにもわかっていつてみて、ついほほえましくなりました。そのそばから、涙はまたほほをつたわってながれました。あたまの上で小鳥たちが、

とちの木の木立こたちのなかから、ぴいちくち、ぴいちくちさえずっていました。小鳥たちはおとむらいに来ていながら、こんなたのしそうにしているのは、この死んだ人が、いまではたかい天国にのぼっていて、じぶんたちのよりももうとうつくしい、もっと大きいつばさがはえていることや、この世で心がけのよかったおかげで、あちらへいっても、神さまのおめぐみをうけて、いまではしあわせにいらしていることをよく知っているからでした。この小鳥たちが、緑ぶかい木立をはなれて、とおくの世界へとび立っていくところを、ヨハンネスはみおくつて、じぶんもいっしょにとんでいきたくなりました。

けれども、さしあたりまず、大きな木の十字架かを切つて、それをおとうさんのお墓かに立てなければなりません。さて、夕がた、それをもつていきますと、どうでしょう、お墓にはまあるく砂が盛つてあつて、きれいな花でかざられていました。それはよその知らない人がしてくれたのです。なくなつたおとうさんはいい人でしたから、ひとにもずいぶん好かれていました。

さて、あくる日朝はやく、ヨハンネスは、わずかなものを包にまとめ、のこつた財産の五十ターレルと二、三枚のシリング銀貨とを、しっかり腰につけました。これだけであてもなしに世の中へ出て行こうというのです。いよいよ出かけるまえ、まず墓地へいって、

おとうさんのお墓におまいりして、主のお祈をとなえてから、こういいました。

「おとうさん、さよなら。ぼくは、いつまでもいい人間でいたいとおもいます。ですから、神さまが、幸福にしてくださいのように、たのんでください。」

ヨハネスがこれからでいいこうという野には、のこらずの花があたたかなお日さまの光をあびて、いきいきと、美しい色に咲いていました。そうして、風のふくままに、それが、がってんがってんしていました。「みどりの国へよくいらっしやいましたね、ここはずいぶんきれいでしよう。」といっているようでした。けれど、ヨハネスは、もういちどふりかえって、ふるいお寺におなごりをおしみました。このお寺で、ヨハネスはこどもものとき洗礼をうけました。日曜日にはきまって、おとうさんにつれられていって、おつとめをしたり、さんび歌をうたったりしました。そのとき、ふと、たかい塔の窓の所に、お寺の＊小魔こおにが、あかいとんがり頭巾をかぶって立っているのがみえました。小魔は目のなかに日がさしこむので、ひじをまげてひたいにかざしているところでした。ヨハネスはかるくあたまをさげて、さよならのかわりにしました、小魔は赤い頭巾をふったり胸に手をあてたり、いくどもいくども、＊＊投げキッスしてみせました。それは、ヨハネスのためにかずかず幸福のあるように、とりわけ、たのしい旅のつづくようにのってくれ

る、まごころのこもったものでした。

*家魔。いえおに 善魔こびとで矮魔こびとの一種。ニース (Nice)。人間の家のなかに住み、こども

の姿で顔は老人。ねずみ色の服に赤い先の尖った帽子をかぶる。お寺にはこの仲間が必ずひとりずついて塔の上に住み、鐘をたたいたりするという。

* * じぶんの手にせつぷんしてみせて、はなれている相手にむかってその手をなげる形。

ヨハンネスは、これから、大きなぎやかな世間へでたら、どんなにたくさん、おもしろいことがみられるだろうとおもいました。それで、足にまかせて、どこまでも、これまでついぞ来たこともない遠くまで、ずんずんあるいて行きました。通っていく所の名も知りません。出あうひとの顔も知りません。まったくよその土地に来てしまっていました。

はじめの晩は、野ツ原の、枯草を積んだ上にねなければなりません。ほかに寝床といつてはなかつたのです。でも、それがとても寝ごこちがよくて、王さまだつてこれほどけつこうな寝床にはお休みにはなるまいとおもいました。ひろい野中に小川がちよろちよろながれていて、枯草の山があつて、あたまの上には青空がひろがっていて、なるほどりつばな寝べやにちがいありません。赤い花、白い花があいだに点てんてん点と咲いているみ

どりの草原は、じゆうたんの敷物でした。にわとこのくきむらとのぼらの垣が、おへやの花たばでした。洗面所のかわりには、小川が水すいしよ晶しょうのようなきれいな水をながしてくれましたし、そこにはあしがこつくり、おじぎしながら、おやすみ、おはようをいつてくれました。お月さまは、おそろしく大きなランプを、たかい青天てんじよ井の上で、かんかんともしてくださいましたが、この火がカーテンにもえつく気づかいはありません。これならヨハンネスもすっかり安心してねられます。それでぐっすり寝こんで、やっと目をさますと、お日さまはもうとうにのぼって、小鳥たちが、まわりで声をそろえてうたっています。

「おはよう。おはよう。まだ起きないの。」

お寺では、かんかん、鐘がなっていました。ちようど日曜日でした。近所のひとたちが、お説教をききに、そろそろでかけていきます。ヨハンネスも、そのあとからついていって、さんび歌のなかまにまじって、神さまのお言葉をききました。するうち、こどものとき、洗礼をうけたり、おとうさんにつれられて、さんび歌をいっしょにうたった、おなじみぶかいお寺に来ているようにおもいました。

お寺のそとの墓地には、たくさんお墓がならんでいて、なかには高い草のなかにうずま

つているものもありました。それをみると、ヨハンネスは、おとうさんのお墓も草むしりして、お花をあげるものがなければ、やがてこんなふうになるのだとおもいました。そこで、べつたりすわつて、草をぬいてやつたり、よろけている十字架かをまつすぐにしてやつたり、風でふきとんでいる花環はなわをもとのお墓の所へおいてやつたりしました。そんなことをしながら、ヨハンネスはかんがえました。

「たぶん、おとうさんのお墓にも、たれかが、おなじことをしておいてくれるでしょう、ぼくにできないかわりに。」

墓地の門そとに、ひとり、年よりのこじきがいて、よぼよぼ、松葉づえにすがつていました。ヨハンネスは、もつていたシリリング銀貨をやつてしまいました。それですつかりたのしくなり、げんきになって、またひろい世の中へでていきました。

夕方、たいへんいやなお天気になりました。どこか宿をさがそうとおもつていそぐうち、夜になりました。でもどうやら、小山の上にぼつり立っているちいさなお寺にたどりつきました。しあわせと、おもての戸があいていたので、そつとそこからはいりました。そうして、あらしのやむまでそこにいることにしました。

「どこかすみつこにかけさせてもらおう。」と、ヨハンネスはいつて、なかにはいつてい

きました。

「なにしろひどくくたびれている、すこし休まずにはいられない。」

こういつて、ヨハンネスはそこにどたんすとすわって、両手をくみあわせて、晩のお祈をいいました。こうして、いつか知らないまに寝込んで、夢をみていました。そのあいだに、そとでは、かみなりがなったり、いなづまが走ったりしていました。

やっと目がさめてみると、もう真夜中^{まよなか}で、あらしはどうにやんで、お月さまが、窓からかんかん、ヨハンネスのねている所までさし込んでいました。ふとみると、本堂のまんなかに、死んだ人を入れた棺^{かん}が、ふたをあけたまま置いてありました。まだお葬式がすすんでいなかったのです。ヨハンネスは正しい心の子でしたから、ちっとも死人をこわいとは思いません。それに死人がなにもわるいことをするはずのないことはよくわかっていました。生きているわるいひとたちこそよくないことをするのです。ところへ、ちようど、そういう生きているわるい人間のなかまがふたり、死人のすぐわきに来て立ちました。この死人はまだ埋^{まい}葬^{そう}がすまないのです、お寺にあずけておいてあったのです。それをそつと棺のなかに休ませておこうとはしらずに、お寺のそとへほうりだしてやろうという、よくないたくらみをしに来たのです。死んだ人を、きのどくなことですよ。

「なんだって、そんなことをするのです。」と、ヨハンネスは声をかけました。「ひどい、わるいことです。エスさまのお名にかけて、どうぞそつとしてあげておいてください。」

「くそ、よけいなことをいうない。」と、そのふたりの男はこわい顔をしました。「こいつはおれたちをいっばいはめたんだ。おれたちから金かねを借りて、かえさないまま、こんどはおまけにおツ死んでしまやがったんだ。おかげで、おれたちの手には、びた一文かえりやしない。だからかたきをとつてやるのだ。寺のそとへ、犬ツころのようにほうりだしてやるのだ。」

「ぼく、五十ターレル、お金があります。」と、ヨハンネスはいいました、「これがもらったありつたけの財産ですが、そつくりあなた方に上げましょう。そのかわり、けつしてそのかわいそうな死人のひとをいじめないと、はつきり約束してください。なあに、お金なんかなくってもかまわない。ぼくは手足はたつしやでつよい、それにしじゅう神さまが守っていてくださるとおもうから。」

「そうか。」と、そのにくらしい男どもはいいました。「きさま、ほんとうにその金かねをはらうなら、おれたちもけつして手だしはしないさ、安心していい。」

こういって、ふたりは、ヨハンネスの出したお金をうけとつて、この子のお人よしの

を大わらいにわらったのち、どこかへ出て行きました。でも、ヨハンネスは死人を、またちやんと棺かんのなかへおさめてやって、両手を組ませてやりました。さて、さよならをいうと、こんどもすつかりあかるい、いい心持になつて、大きな森のなかへはいつていきました。

森のなかがあるきながらみまわすと、月あかりが木立をすけてちらちらしているなかに、かわいらしい妖ようじよ女によたちのおもしろそうにあそんでいるのが目にはいりました。妖女たちはへいきでいました。それは、いま方はいつて来たヨハンネスが、やさしい、いい人間だということをよく知っているからでした。わるい人間だけには、妖女のすがたがみたくとも見えないのです。まあ、かわいらしいといつて、ほんとうに、指だけのせいもない妖女もいましたが、それぞれながい金いろの髪の毛を、金のくしですいていました。ふたりずつ組になつて、木の葉や、たかい草の上にむすんだ大きな露の玉の上でぎったんぼつたんしていました。ときどきこの露の玉がころがりだすと、のっているふたりもいっしょにころげて、ながい草のじくのあいだでとまります。すると、ほかのちいさいなかまに、わらい声とときの声がおこりました。それはずいぶんおもしろいことでした、そのうち、みんな歌をうたいだしましたが、きいているうち、ヨハンネスは、こどものじぶんおぼえた歌

を、はつきりおもいだしました。銀のかんむりをあたまにのせた大きなまだらぐもが、こちらの垣からむこうの垣へ、ながいつり橋や御殿を網で張りわたすことになりました。さて、そのうえにきれいな露がおちると、あかるいお月さまの光のなかでガラスのようにきらしました。こんなことがそれからそれとつづいていくうち、お日さまがおのぼりになりました。すると、妖女たちは、花のつぼみのなかにはい込みました。朝の風が、つり橋やお城をつかむと、それなり大きくもの網になつて、空の上にとびました。

さて、ヨハンネスがいよいよ森を出ぬけようとしたとき、しっかりと男の声で、うしろからよびとめるものがありました。

「もしもし、ご同行、どこまで旅をしなさる。」

「あてもなくひろい世間へ。」と、ヨハンネスはいいました。「父親もなし、母親もなし、たよりのないわかものです。でも神さまは、きつと守ってくださいるでしょう。」

「わたしも、あてもなく世間へでていくところだ。」と、その知らないひとはいいました。「ひとつ、ふたりでなかまになりましようか。」

「ええ、そうしましょう。」と、ヨハンネスもいいました。そこで、ふたりは、いっしょに出かけました。じき、ふたりは仲よしになりました。なぜとって、ふたりともいい人

たちだったからです。ただ、ヨハンネスは、この知らない道づれが、じぶんよりもはるか
はるかかしこい人だということに、気がつきました。この人は世界じゅうたいいていあるい
ていて、なんだって話せないことはないくらいでした。

お日さまが、もうすいぶんたかくのぼったので、ふたりは大きな木の下に腰をおろして、
朝の食事にかかりました。そこへ、ひとりのおばあさんがあるいて来ました。いやはや、
ずいぶんなおばあさん、まるでうように腰をまげてあるいて、やっとしゅもくづえにす
がっていました。それでも、森でひろいあつめたたきをひとたば、せなかにのせていま
した。前掛が胸でからげてあつて、ヨハンネスがふとみると*しだの木のじくにやなぎの
枝をはめた大きいむちが三本、そこからとびだしていました。で、ふたりのいるまえをよ
ろよろするうち、片足すべらしてころぶとたん、きやあとたかい声をたてました。きのど
くに、このおばあさん、足をくじいたのですね。

*しだの木は魔法の木。しだの木のむちに、やなぎの枝の柄をはめる。

ヨハンネスはそのとき、ふたりでおばあさんをかかえて、住居すまいまでおくっていつてやろ
うといいました。道づれの知らない人は、はいのうをあけて、小箱をだして、いや、この
なかにこうやくがはいっている、これをつければ、すぐと足のきずがなおって、もとお

りになるから、ひとりでうちへかえれて、足をくじいたことなぞないようになるといいました。そして、そのかわりに、といつても、なあに、その前掛にくるんでいる三本のむちをもらうだけでいいのだがね、といいました。

「とんだ高い薬代だやくだいの。」と、おばあさんはいって、なぜかみように、あたまをふりました。

それで、なかなか、このむちを手ばなしたがないようすでしたが、くじいた足のままそこにたおれていることも、ずいぶんらくではないので、とうとう、むちをゆずることになりました。そのかわり、ほんのちよっぴりくすりをなすったばかりで、このおばあさん、すぐぴんと足が立つて、まえよりもたっしやに、しゃんしゃんあるいていきました。これはまさしく、このこうやくのききめでした。でも、それだけに、薬屋などでめつたに手にはいるものではありません。

「そんなむちみたいなもの、なんにするんです。」と、ヨハンネスは、そこで旅なかまにたずねました。

「どうして、三本ともけっこうな草ぼうきさ。」と、相手はいいました。「こんなものをほしがるのは、わたしもとんだかわりものさね。」

さて、それからまた、しばらくの道のりを行いました。

「やあ、いけない、空がくもって来ますよ。」と、ヨハネスはいいました。「ほら、むくむく、きみのわるい雲がでて来ましたよ。」

「いんや。」と、旅なかまはいいました。「あれは雲ではない。山さ。どうしてりつぱな大山さ。のぼると雲よりもたかくなつて、澄んだ空気の中になに立つことになる。そこへいくと、どんなにすばらしいか。あしたは、もうずいぶんとおい世界に行っていることになるよ。」

でも、そこまでは、こちらでながめたほど近くはありませんでした。まる一日たつぷりあるいて、やっと山のふもとにつきました。見あげると、まっくろな森が空にむかつてつ立つていて、町ほどもありそうな大きな岩がならんでいました。それへのぼろうというのは、どうしてひととおりの骨の折れるしごとではなさそうです。そこで、ヨハネスと旅なかまは、ひと晩、ふもとの宿屋にとまって、ゆっくり休んで、あしたの山のぼりのげんきをやしなうことにしました。

さて、その宿屋の下のへやの、大きな酒場さかばには、おおぜい人があつまっていました。人形芝居をもつて旅まわりしている男が来て、ちようどそこへ小さい舞台をしかけたところ

でした。みんなはそれをとりまいて、幕のあくのを待つさいちゆうでした。ところで、いちばんまえの席は、ふとった肉屋のおやじが、ひとりでせんりようしていました。それがまた最上の席でもあったでしょう。しかも大きなブルドッグが、それがまあなんとくらしい、くいつきそうな顔をしていたでしょう。そやつが主人のわきに座をかまえて、いっばし人間なみに、大きな目をひからしていました。

そのうち、芝居がはじまりましたが、それは王さまと女王さまの出てくる、なかなかおもしろい喜劇でした。ふたりの陛下は、びろうどの玉座に腰をかけて、どうしてなかなかの衣裳いしやうもちでしたから、金のかんむりをかぶって、ながいすそを着物のうしろにひいていました。ガラスの目玉をはめて、大きなうわひげをはやした、それはかわいらしいでくのぼうが、どの戸口にも立っていて、しめたり、あけたり、おへやのなかにすすしい風のはいるようにしていました。どうもなかなかおもしろい喜劇で、いい気ばらしになりました。そのうち、人形の女王さまは立ち上がって、ゆかの上をそろそろあるきだしました。そのときまあ、れいのブルドッグが、いったい、なんとおもったのでしょうか、それをまた主人がおさえもしなかつたものですから、いきなり、舞台にとびだして来て、おやというまもなく、女王さまのかほそい腰をばつくりかみました。とたん、「がりッがりッ」と

いう音がきこえました。いやはや、おそろしいことでした。

かわいそうに、人形つかいの男はすっかりしよげて、女王さまの人形をかかえて、おろおろしていました。それは一座のなかでも、いちばんきりょうよしの人形でしたのに、にくにくいブルドッグのために、あたまをかみきられてしまったのですからね。けれども、みんな見物が散ってしまったあと、ヨハンネスといっしょにみに来ていた旅なかまが、こども、そのきずをなおしてやろうといいだしました。そこで、れいの小箱をあけて、おばあさんのくじいた足を立たせてやったあのこうやくを、人形にぬってやりました。人形は、こうやくをぬってもらうと、さつそくきずがきれいになおって、おまけに、じぶんで手足までたつしやにうごかせるようになりました。もう糸であやつることもいらなくなりました。人形はまるで、生きた人のようでした。ただ口がきけないだけです。人形芝居の親方は、どんなによろこんだでしょう。人形つかいがつかわなくても、この人形は勝手にじぶんでおどれるのです。これは、ほかの人形にまねのならないことでした。

夜中よなかになつて、宿屋にいた人たちがのこらず寝しずまろうというとき、どこかでしくしくすすり泣く声が出て、いつまでもやまないものですから、みんな気にして起きあがって、いったい、たれが泣いているのか見ようと思いました。それがどうも人形芝居の舞台のほう

らしいので、親方がすぐ行つてみますと、でくのぼうは、王さまはじめのこらずの近衛兵がかさなりあつて、そこにころがつていました。いまし方かなしそうにしくしくやつていたのは、このガラス目だまをきよとんとさせている人形なかまであつたのです。それは、女王さまとおなじように、ちよつぱり、こうやくをぬつてもらつて、じぶんで勝手にうごけるようになりたいというのです。すると、女王さまもそばで、べったりひぎをついて、そのりつばな金かんむりをたかくささげながら「どうぞ、わたくしからこのかんむりをおとりあげください、そのかわり、夫にも、家来たちにも、どうぞお薬をぬつていただきますように。」といのりしました。そうきいて、この人形芝居の親方は、きのどくに、人形たちが、ふびんでふびんでついつしよに泣きだしました。親方はそこで、旅なかまにたのんで、あすの晩の興行のあがりのをこらずさしあげます。どうぞ、せめて四つでも五つでも、なかできりようよしな人形にだけでも、こうやくを塗つてやつてはもらえませうまいかと、くれぐれたのみました。ところで、旅なかまは、ほかのものは一切いらない、わたしのほしいのは、そのおまえさんの腰につるしている劔だけだといいました。そうして、劔を手に入れると、六つの人形のこらずにこうやくをぬつてやりました。すると人形たちは、さつそくおどりだしました。しかもその踊のうまいこと、そこにみていたむ

すめたちが、生きている人間のむすめたちのこらすが、すぐといっしょにおどりださずにはいられないくらいでした。するうち、御者と料理番のむすめも、つながっておどりだしました。給仕人もへや女中も、おどりだしました。お客たちも、いっしょにおどりだしました。とうとう十能じゅうのうと火ばしまでが、組になっておどりだしました。でも、このひと組は、はじめひとはねはねると、すぐどころんでしまいました。いやもう、ひと晩じゅう、にぎやかで、たのしかったことといったら。

つぎの朝、ヨハンネスは旅なかまとつれ立って、みんなからわかれて行きました。高い山にかかって、大きなもみの林を通っていきました。山道をずんずんのぼるうちに、いつかお寺の塔が、ずっと目のしたになって、おしまいにはそれが、いちめんみどりのなかっぽつりとただひとつ、赤いいちごの実をおいたようにみえました。もうなん里もなん里もさきの、ついつつたことのない遠方までがみはらせました。——このすばらしい世界に、こんなにもいろいろとうつくしいものを、いちどに見るなんということを、ヨハンネスは、これまでに知りませんでした。お日さまは、さわやかに晴れた青空の上からあたたかく照りかがやいて、峰と峰とのあいだから、りょうしの吹く角笛つのぶえが、いかにもおもしろく、たのしくきこえました。きいているうちにもう、うれし涙が目のなかにあふれだしてくる

と、ヨハンネスは、おもわずさげばずにはいられませんでした。

「おお、ありがたい神さま、こないことをわたしたちにしてくださって、この世界にあるかぎりのすばらしいものを、惜しまずみせてくださいますあなたに、まごころのせつぷんをささげさせてください。」

旅なかまも、やはり、手を組んだまま、そこに立って、あたたかなお日さまの光をあびているふもとの森や町をながめました。ちょうどそのときふと、あたまの上で、なんともめずらしく、かわいらしい声がしました。ふたりがあおむいてみると、大きいまつ白なはくちようが一羽、空の上に舞っていました。そのうたう声はいかにもうつくしくて、ほかの鳥のうたうのとまるでちがっていました。でも、その歌が、だんだんによわって来たとき、鳥はがつくりうなだれました。そうして、それは、ごくものしずかに、ふたりの足もとに落ちて来ました。このうつくしい鳥は死んで、そこに横たわっているのです。

「こりやあ、そろつてみごとなつばさだ。」と、旅なかまはいいました。「どうだ、このまつ白で大きいこと、この鳥のつばさぐらいになると、ずいぶんの金^{かね}高だ、これは、わたしがもらつておこう。みたまえ、劔をもらつて来て、いいことをしたろうがね。」

こういつて、旅なかまは、ただひとつち、死んだはくちようのつばさを切りおとして、

それをじぶんのものにしました。

さて、ふたりは山を越えて、またむこうへなん里もなん里も旅をつづけていくうちに、とうとう、大きな町のみえる所に来ました。その町にはなん百とない塔がならんで、お日さまの光のなかで、銀のようにきらきらしていました。町のまんなかには、りっぱな大理石のお城があつて、赤い金で屋根が葺ふけていました。これが王さまのお住居すまいでした。

ヨハンネスと旅なかまとは、すぐ町にはいろいろとはしないで、町の入口で宿をとりました。ここで旅のあかをおとしておいて、さっぱりしたようすになつて、町の往來をあるこゝうというのです。宿屋のていしゆの話では、王さまという人は、心のやさしい、それはいいひとで、ついでに人民に非道ひどうをはたらいたことはありません。ところがその王さまのむすめというのが、やれやれ、なさけないことにひどいわるもののお姫さまだということです。きりようがすばらしくよくて、世にはこんなにもしとやかな人があるものかとおもうほどですが、それがなんになるでしょう、このお姫さまがいけない魔法つかいで、もうそのおかげで、なんととなくなりっぱな王子が、いのちをなくしました。——それはたれでもお姫さまに結婚を申しこむおゆるしが出ていて、それは王子であろうとこじきであろうと、たれでもかまわない、というのですが、そのかわり、お姫さまのおもっている三つのことを

たずねられたら、それをそっくりあてなければならぬのです。そのかわり、あたればお姫さまをおよめにして、おとうさまの王さまのおかくれになったあとでは、けっこうこの国の王さまにもなれる。けれどもその三つともあたらなければ、首をしめられるか、切られるかしなければなりません。このうつくしいお姫さまが、こんなにもひどい、わるものなわけです。おとうさまの老王さまも、そのことでは、ずいぶんつらがつておいでなのですが、そんなむごたらしいことをするなとめるわけにいかないというのは、いつかお姫さまのむこえらみについては、けっして口だししないといいだされたため、お姫さまはなんでもじぶんのしたいままにしてよいことになっているからです。それで、あとから、あとから、ほうぼうの国の王子が代る代るやつて来て、なぞをときそこなつては、首をしめられたり、切られたりしました。そのくせ、まえもつていきかかれていますから、なにも申込をしなければいいのですが、やはりお姫さまをおよめにたれもしたがりました。お年よりの王さまは、かさねがさねこういかなしい不幸なことのおこるのを、心ぐるしくおもつて、年に一日、日をきめて、のこらずの兵隊をあつめて、ともども神さまのまえにひれ伏して、どうか王女が善心にかえるようにとせつないおいのりをなさるのですが、をなさるのですが、お姫さまはどうしてもそれをあらためようとはしないのです。この町

で年よりの女たちが、ブランデーをのむにも、黒くしてのむのは、それほどかなしがっている心のしようこをみせるつもりでしょう。まあ、そんなことよりほかにはしようがないのですよ。

「いやな王女だなあ。」と、ヨハンネスはいました。「そんなのこそ、ほんとうにむちでもくらわしたら、ちつとはよくなるかもしれない。わたしがお年よりの王さまだったら、とうにひどくこらしめてやるところなのに。」

そのとき、そとで、町の人たちが、万歳万歳とさけぶ声がしました。ちょうど王女のお通りなのです。なるほど、王女はじつに目のさめるようなうつくしきで、このお姫さまがわるい人間だということをわすれさせるほどでしたから、ついたれも万歳をさげばずにはいられなかったのです。十二人のきれいな少女がおそろいの白絹の服で、手に手に金のチューリップをささげてもち、まっ黒な馬にのって、両わきにしがいました。王女ご自身は、雪とみまがうような白馬はくばに、ダイヤモンドとルビイのかざりをつけてのっていました。お召の乗馬服は、純金の糸を織ったものでした、手にもったむちは、お日さまの光のようにきらきらしました。あたまにのせた金のかんむりは、大空のちいさな星をちりばめたようですし、そのマントはなん千とないちよちようのはねをあつめて、縫いあわせたもので

した。そのくせ、そんなにしてかぎり立てたのこらずの衣裳いしやうも、王女みずからのうつくしきにはおよびませんでした。

ヨハンネスは、王女をみたせつな、顔いちめんかつと赤くほてって、ただひとしずくの血のしたたりのようになりました。もうひと言もものがいえなくなりました。まあ、この王女は、おとうさんのなくなった晩、ヨハンネスが夢でみた、あの金のかんむりのうつくしいむすめにそっくりなのです。あんまりうつくしいので、いやおうなしに、いきなり大好きにさせられてしまいました。この人が、じぶんのかけたなぞが、そのとおりにとけなといったって、ひとの首をしめたり、きらせたりするわるい魔法つかいの女だなんて、そんなはずがあるものか。「たれでも、それは、この上ないみじめなこじきでも、お姫さまに結婚を申し込むことはかまわないということだ。よし、ぼくもお城へでかけよう。

「どうしたっていかずにはいられないもの。」

ところでみんなは、口をそろえて、そんなまねはしないがいい、ほかのものと同様、うきめをみるにきまつているといいました。

旅なかまも、やはり、おもいとまるようにいいきかせました。でも、ヨハンネスは、大じょうぶ、うまくやってみせますといったって、くつと上着のちりをはらって、顔と手足をあ

らつて、みごとな金髪きんぱつにくしを入れました。それからひとりで町へでていって、お城の門まで来ました。

「おはいり。」ヨハンネスが戸をたたくと、なかで、お年よりの王さまがおこたえになりました。——ヨハンネスがあけてはいると、ゆつたりした朝着のすがたに、縫いとりした上ぐつをはいた王さまが、出ておいでになりました。王冠をあたまにのせて、王しやくを片手にもつて、王さまのしるしの地球儀の珠たまを、もうひとつの手にのせていました。

「ちよつとお待ちよ。」と、王さまはいつて、ヨハンネスに手をおだしになるために、珠を小わきにおかかえになりました。ところが、結婚申込に来た客だとわかると、王さまはさつそく泣きだして、しやくも珠も、ゆかの上にごろがしたなり、朝着のそでで、涙をおふきになるしまつでした。おきのどくな老王さま。

「それは、およし。」と、王さまはおつしやいました。「ほかのもの同様、いいことはないよ。では、おまえにみせるものがある。」

そこで、王さまは、ヨハンネスを、王女の遊園ゆうえんにつれていきました。なるほどすごい有様です。どの木にもどの木にも、三人、四人と、よその国の王さまのむすこたちが、ころされてぶら下がっていました。王女に結婚を申し込んで、もちだしたなぞをいいあてる



ことができなかつた人たちです。風がふくたんびに、死人の骨がからから鳴りました。それを、小鳥たちもこわがって、この遊園ゆうえんには寄りつきません。花という花は、人間の骨にいわいつけてありました。植木ぼちには、人間のしやりツ骨が、うらめしそうに歯をむきだしていました。まったく、これが王さまのお姫さまの遊園とはうけとれない、ふうがわりのものでした。

「ほらね、このとおりだ。」お年よりの王さまは、おっしゃいました。「いずれおまえも、ここにならんでいる人たちとそっくりおなじ身の上になるのだから、これだけはどうかやめておくれ。わたしになさけないおもいをさせないでおくれ。わしは心ぐるしくてならぬいのだからな。」

ヨハンネスは、この心のいいお年よりの王さまのお手にせつぷんしました。そうして、わたくしはうつくしいお姫さまを心のそこからしたっています。きつと、うまくいくつもりですといいました。

そういつているとき、当のお姫さまが、侍女じじよたちのこらず引きつれて、馬にのつたまま、お城の中庭へのり込んで来ました。そこで、王さまも、ヨハンネスもそこへいつてあいさつしました。お姫さまはそれこそあでやかに、ヨハンネスに手をさし出しました。それで、

よけい好きになりました。世間の人たちがうわさするように、このひとがそんなわるい魔法つかいの女なぞであるわけがありません。それから、みんなそろって広間へあがると、かわいいお小姓こしやうたちが、くだもののお砂糖漬だの、くるみのこしやう入りのお菓子だのをだしました。でも、王さまはかなしくて、なんにもお口に入れるどころではなく、それに、くるみのこしやう入のお菓子はかたくて、お年よりには齒が立ちませんでした。

さて、ヨハンネスは、そのあくる日、またあらためてお城へくることになりました。そこに審判官しんぱんかんと評定官ひやうじやうかんのこらずがあつまつて、問答もんどうをきくことになっていました。はじめの日うまく通れば、そのあくる日また来られます。でも、これまで、もう最初の日からうまくいったためしがないのです。そうなれば、いやでもいのちひとつふいにしなくてはなりません。

ヨハンネスは、いったいどうなるかなんこのという心配はしません。ただもううきうきと、うつくしいお姫さまのことばかりかんがえていました。そうしておめぐみぶかい神さまが、きつとたすけてくださるとかたく信じていました。ではどういふうにといつても、それはわかりません。そんなことはかんがえないほうがいいとおもっていました。そこで、宿へかえる道道も、往來をおどりおどりとくると、旅なかまが待ちかまえていました。

ヨハンネスは、王女がやさしくもてなしてくれたこと、いかにもうつくしいひとだとうこと、それからそれととめどなく話しました。あしたはいよいよお城へでかけて、みごとなぞをいいあてて、運だめしをするのだといって、もうそればかり待ちこがれていました。

けれども、旅なかまは、かぶりをふって、うかない顔をしていました。

「わたしは、とてもきみを好いているのだ。」と、旅なかまはいいました。「だから、おたがいこれからもながくいつしよにいたいとおもうのに、これなりおわかれにならなくてはならない。ヨハンネス、きみはきのどくなひとだよ。わたしは泣きたくてならないが、こうしているのも今夜かぎりだろうから、せつかくのきみのたのしみをさまたげるでもない。愉快にしていようよ。大いに愉快にね。泣くことなら、あす、きみのでていったあとで、存分ぞんぶんに泣けるからな。」

お姫さまのところへ、あたらしい結婚の申し込み手がやって来たことを、もうさつそく町じゅうの人たちが知っていました。それで、たれも大きなかなしみにおそわれました。芝居は木戸をしめたままです。お菓子屋さんたちは申しあわせたように、小ぶたのお砂糖人形を黒い、喪ものリボンで巻きました。王さまは、お寺で坊さんたちにまじって、神さま

にお祈をささげました。どこもかしこもしめつばいことでした。それはどうせ、ヨハンネスだけに、これまでのひとたちとちがったいい目が出ようとは、たれにもおもえなかったからでした。

その夕方、旅なかまは、大きなはちにいっばい、くだものお酒のポンスをこしらえて来て、それでは大いに愉快にやって、ひとつ王女殿下の健康をいわって乾杯かんぱいしようといいました。ところが、ヨハンネスは、コップに二はいのむと、もうすっかりねむくなって、目をあけていることができなくなり、そのままぐっすり寝込んでしまいました。旅なかまは、ヨハンネスをそつといすからだき上げて寢床に入れました。夜がふけて、そとはまっくらやみになりました。旅なかまは、れいのはくちようから切りとった二枚の大きなつばさを、しっかりと、肩にいわいつけました。そうして、あのころんで足をくじいたおばあさんからもらった三本のむちのなかの、いちばんながいのをかくしにつっこむと、窓をあけて、町の丘から、お城のほうへ、ひらひらとんでいきました。それから王女の寢べやの窓下に来て、そつと片すみにしのんでいました。

町はひっそりしていました。ちょうど時計は十二時十五分まえをうったところでした。ふと窓があいたとおもうと、王女はながい白マントの上に、まっ黒なつばさをつけて、ひら

りと舞い上がりました。町の空をつつきつて、むこうの大きな山のほうへとんでいきました。ところで、旅なかまは、王女に気づかれぬように、からだをみえなくしておいて、そのあとを追いながら、王女をむちでうちました。うたれるそばから、ひどく血がでました。ほほう、たいへんな空の旅があつたものです。風が王女のマントを、それこそ大きな舟の帆のように、いっぱいにくらませて行く上から、ほんのりとお月さまの光がすけてみえました。

「おお、ひどいあられだ、ひどいあられだ。」

王女は、むちのあたるたんびにこういいました。なに、ぶたれるのはあたりまえです。それでもやつと山まで来て、とんとん戸をたたきましたとたんに、ごろごろひどいかみなの音がして、山はぱっくり口をあきました。王女はなかへはいました。旅なかまもつづいてはいました。でも、姿がみえなくしてあるので、たれも気がつきません。ふたりがながい廊下ろうかをとおつていくと、両側の壁が奇妙にきらきら光りました。それは、なん千とない火ぐもが、壁の上をぐるぐるかけまわつて、火花のように光るためでした。それから、金と銀でつくつてある大広間にはいました。そこには、ひまわりぐらい大きい赤と青の花が、壁できらきらしていました。でもその花をつむことはできません。というのは、

その花のじくがきみのわるい毒へびで、花というのも、その大きな口からはきだすほのおだからです。天てんじょう井には、いちめん、ほたるが光っているし、空いろのこうもりが、うすいつばさをばたばたさせていました。じつになんともいえないかわったありさまでした。ゆかのまん中に、王さまのすわるいすがひとつすえてあつて、これを四頭の馬のがい骨が背中にのせていました。その馬具はまつ赤な火ぐもでした。さて、そのいすは、乳いろしたガラスで、座ぶとんというのも、ちいさな黒ねずみがかたまつて、しつぽをかみあつてゐるものでした。いすの上に、ばらいろのくもの巣でおった天てんがい蓋がつるしてあつて、それにとてもきれいなみどり色したかわいいはえが、宝石をちりばめたようにのつていました。ところで、王冠をかぶつて、王しやくをかまえて、にくらしい顔で、王さまのいすにじいさんの魔法つかいが、むんずと座をかまえていました。魔法つかいはそのとき、王女のひたいにせつぷんすると、すぐわきのりつぱないすにかけさせました。やがて音楽がはじまりました。大きな黒こおろぎが、ハーモニカをふいて、ふくろうが太鼓のかわりに、はねでおなかをたたきました。それは、とぼけた音楽でした。かわいらしい、豆粒のような小鬼どもは、ずきんに鬼火をつけて、広間のなかをおどりまわりました。こんなにみんないても、たれにも旅なかまの姿はみえませんでしたから、そつと王さまのいすのうしろ

に立つて、なにもかもみたりきいたりしました。さて、そこへひとかど、もつたいらしく気どつて、魔法御殿のお役人や女官たちが、しやなりしやなり出て来ました。でも正しくものみえる目でみますと、すぐとばけの皮があらわれました。それはほうきの柄にキヤベツのがん首をすげたばけもので、それが縫いとりした衣裳いしやうを着せてもらつて、魔法つかいの魔法で、息を吹き込んでもらつて、動いているだけでした。どのみち、こけおどかしにしていたことで、なにがどうだつてかまつたことはありません。

しばらくダンスがあつたあとで、王女は魔法つかいに、あたらしく、結婚の申し込み手の来たことを話しました。それで、あしたの朝お城へやってくるが、相手をためすには、なにを心におもっていることにしようか、相談をかけました。

「よろしい、おききなさいよ。」と、魔法つかいはいいました。「まあ、なんでもごくたやすいことをかんがえるのさ。すると、かえつて、わからないものだ。そう、じぶんのくつのことでもかんがえるのだなあ。それならまずあたるまい。それで首をきらせてしまうところで、あすの晩くるとき、その男の目だまをもつてくることを、わすれないようにな。久しぶりでたべたいから。」

王女は、ていねいにあたまをさげて、目だまはわすれずにもつて来ますといいました。

魔法つかいが山をあけてやりますと、王女はお城へとんでかえりました。でも、旅なかまはどこまでもあとについて行って、したたかむちでぶちました。王女は、あられがひどい、ひどいとこぼし、こぼし、一生けんめいにげて、やっと寝べやの窓から、なかへはいりました。旅なかまも、それなり宿のほうへとんでかえっていきますと、ヨハンネスは、まだねむったままでしたから、そつとつばさをぬいで、じぶんも床にはいりました。なにしろ、ずいぶんつかれていたでしょうからね。

さて、あくる日まだくらしいちから、ヨハンネスは目をさましました。旅なかまもいっしょに起きて、じつにゆうべはふしぎで、お姫さまと、それからお姫さまのくつの夢をみたという話をして、だから、ために、お姫さま、あなたはごじぶんのくつことをおもつて、それをきこうとなさるのでしようといってごらん、といました、これは、山で魔法つかいのいったことばを、そつくりきいていつているだけなのですが、そんなことはおくびにもださず、ただ、王女がじぶんのくつのことをかんがえていやしないか、きいてみよとだけいったのです。

「ぼくにしてみれば、なにをどうこたえるのもおなじです。」と、ヨハンネスはいいました。「たぶんあなたが夢でごらんになったとおりでしよう。それはいつだって、やさしい

神さまが、守っていてくださるとおもって、安心して居るのですからね。けれど、おわかれのごあいさつだけはしておきましょうよ。答をまちがえれば、もう、二どとおめにかかれないんですから。」

そこで、ふたりはせつぶんしあいました。やがて、ヨハンネスは、町へでて、お城にはいつて行きました。大広間には、もういっぱい人があつまっていました。審判官しんぱんかんはより

かかりのあるいすに、からだをうずめて、ふんわりと鳥のわた毛を入れたまくらを、あたまにかつていました。なにしろこのひとたちは、たくさんにものをかながえなくてはならないのでしてね。そのとき、お年よりの王さまは立ち上がって、白いハンカチを目におおてになりました。するうち、お姫さまがはいつて来ました。きのうみたよりまた一だん立ちまさつてうつくしく、一同にむかつて、にこやかにあいさつしました。でも、ヨハンネスには、わざわざ手をさしのべて、「あら、おはようございます。」といいました。

さて、ヨハンネスがいよいよ、お姫さまのかんがえていることをあてるだんになりました。まあ、そのとき、お姫さまは、なんとという人なつこい目で、ヨハンネスをみたことでしょうか。ところが、ヨハンネスの口から、ただひとこと「くつ」とでたとき、お姫さまの顔はさつとかわって、白墨はくぼくように白くなりました。そうして、からだじゅう、がたがた

ふるえていました。けれどもう、どうにもなりません。みごと、ヨハンネスはいいあてたのですもの。

ほほう、ほほう。お年よりの王さまは、どんなにうれしかったでしょう。あんまりうれしいので、みごとなどんぼをひとつ、王さまはきっておみせになりました。すると、みんなもうれしがって手をたたいて、王さまと、それから、はじめてみごとにいいあてたヨハンネスを、はやし立てました。

旅なかまも、まずうまくいったときいて、ほっとしました。ヨハンネスは、でも、手をあわせて、神さまにお礼をいいました。そして、神さまは、あとの二どもきつと守ってくださるにちがいないとおもいました。さて、あくる日もつづいてためされることになっていました。

その晩も、ゆうべのようにすぎました。ヨハンネスがねむっているあいだに、旅なかまは、王女のあとについて、山までとぶ道道、こんどはむちも二本もちだして来て、まえよりもひどく王女をぶちました。旅なかまはたれにも見られないで、なにかも耳に入れて来ました。王女は、あしたは手袋のことをかんがえるはずでしたから、そのとおりをまた、夢にみたようにして、ヨハンネスに話しました。ヨハンネスはこんどもまちがいなくいい

あてたので、お城のなかはよろこびの声があふれました。王さまがはじめしておみせになったように、こんどは御殿じゆうが、そろってとんぼをきりました。そのなかで王女は、ソファに横になったなり、ただひとことも物をいいませんでした。さて、こうなると、三どめも、みごとヨハンネスにいいあてられるかどうか、なにごともそれしだいということになりました。それさえうまくいけば、うつくしいお姫さまをいただいた上、お年よりの王さまのおなくなりなつたあととは、そっくり王国をゆずられることになるのです。そのかわり、やりそこなうと、いのちをとられたうえ、魔法つかいが、きれいな青い目だまをペロりとたべてしまうでしょう。

その晩も、ヨハンネスは、はやくから寢床にはいって、晩のお祈をあげて、それですっかり安心してねむりました。ところが、旅なかまは、ねむるどころではありません。れいのつばさをせなかにいわいつけて、劔を腰につるして、むちも三本ともからだにつけて、それから、お城へとんでいきました。

そとは、目も鼻もわからないやみ夜でした。おまけにひどいあらしで、屋根の石かわらはけしとぶし、女王の遊園ゆうえんのがい骨のぶら下がっている木も、風であしのようにくなく、なまがりしました。もうしきりなし稲光いなびかりがして、かみなりがごろごろ、ひと晩じゆう

やめないつもりらしく、鳴りつづけました。やがて、窓がぱあつとあいて、王女は、とびだしました。その顔は「死」のように青ざめていましたが、このひどいお天気を、それでもまだ荒れかたが足りないといったそうにしています。王女の白マントは風にあおられて、空のなかを舞いながら、大きな舟の帆のように、くるりくるりまくれ上がりしました。ところで、旅なかまは、れいの三本のむちで、びしびしと、それこそ地びたにぼたりぼたり、血のしずくがしたたりおちるほどぶちましたから、もうあぶなく途中でとべなくなるどころでした。でもどうにかこうにか、山までたどりつきました。

「どうもひどいあられでしたの。」と、王女はいいました。「こんなおてんきにそとへでたのははじめて。」

「その代り、こんどは、よすぎてこまることもあるさ。」と、魔法つかいはいいました。

王女はそのとき、二どまですまくいいてあてられたことを話して、あしたまたうまくやられて、いよいよヨハンネスが勝ちときまると、もう二度と山へは来られないし、魔法もつかえなくなるというので、すっかりしよげかえっていました。

「こんどこそはあたらないうよ。」と、魔法つかいはいいました。「なにかその男のとてもかんがえつかないことをおもいつこう。万一、これがあたるようなら、その男はわしより

ずつとえらい魔法つかいにちがいなかるう。だが、まあ愉快にやろうよ。」

そういつて、魔法つかいは、王女の両手をとって、ちょうどそのへやにいた小鬼や鬼火などと輪をつくつて、いつしよにおどりました。すると、壁の赤ぐもまでが、上へ下へとおもしろそうにとびまわつて、それはまるで火花が火の子をとばしているようにみえました。ふくろうは太鼓をたたくし、こおろぎは口ぶえをふく、黒きりぎりすは、ハーモニカをならしました。どうしてなかなかにぎやかな舞踏会ぶとうかいでした。

みんなが、たつぷりおどりぬいてしまつと、王女は、もうここらでかえりましよう、お城が大きわざになるからといいました。そこで、魔法つかいは、せめて途中までいつしよにいられるように、そこまで送つていくといいました。

そこで、ふたりは、ひゆうひゆう、ひどいあらしのふくなかへとびだした。旅なかまは、ここぞと三本のむちで、ふたりのせなかもくだけよとばかり、したたかぶちのめしました。さすがの魔法つかいも、これほどはげしいあられ空に、そとへでたのははじめてでした。さて、お城ちかくまで来たとき、いよいよわかれぎわに、魔法つかいは王女の耳のはたに口を寄せて、

「わしのあたまをかんがえてこらん。」といいました。けれども、旅なかまは、それすら

のこらず耳にしまい込んでしまいました。そうして、王女が窓からすべりこむ、魔法つかいが引つかえそうとするとたん、ぎゅツと魔法つかいのながい黒ひげをつかむがはやいか、劔をひきぬいて、そのにくらしい顔をした首を、肩のつけ根からすばりと切りおとしました。まるで、相手にこちらの顔をみるすきさえあたえなかつたのです。さて、その首のないむくろは、みずうみの魚に投げてやりましたが、首だけは、水でよくあらって、絹のハンケチにしつかりくるんで、宿までかかえて、もつてかえって、ゆつくり床とこに休んで寝ました。

そのあくる朝、旅なかまは、ヨハンネスに、ハンケチの包をさずけて、王女が、いよいよじぶんのかんがえているものはなにかとって問いかけるまで、けっして、むすび目をほどいてはいけないといいました。

お城の大広間には、ぎつしり人がつまつて、それはまるで、だいこんをいっしょにして、たばにくくつたようでした。評定官ひょうじょうかんは、れいのおり、ながながといすによりかかつて、やわらかなまくらをあたまにあてがっていました。老王さまは、すっかり、あたらしいお召ものに着かえて、金のかんむりもしゃくも、ぴかぴかみがき立てて、いかめしいごようすでした。それにひきかえ、お姫さまのほうは、もうひどく青い顔をして、おとむ

らいにでもいくような、黒づくめの服でした。

「なにを、わたしはかんがえていますか。」

王女は、ヨハンネスにたずねました。

すぐ、ヨハンネスは、ハンケチのむすび目をほどきました。すると、いきなり、魔法つかいの首が、目にはいったので、たれよりもまずじぶんがぎよつとしました。あんまり、すごいものをみせられて、みんなもがたがたふるえだしました。そのなかで、王女はひとり、石像のようにじんとすわり込んだなり、ひとこともものがいえませんでした。それでも、やっと立ち上がって、ヨハンネスに手をさしのべました。なにしろ、みごとにいいあてられてしまったのです。王女は、もう、たれの顔をみようともしないで、大きなため息ばかりついていました。

「さあ、あなたは、わたしの夫おつとです。今晚、式をあげましょう。」

「そうしてくれると、わしもうれしい。」と、お年よりの王さまはいいました。「ぜひ、そういうことにしよう。」

みんなは、万歳をとなえました。近衛このえの兵隊は、音楽をやって、町じゆうねりあるきましました。お寺の鐘は鳴りだしますし、お菓子屋のおかみさんたちは、お砂糖人形の黒い喪もの



リボンをどけました。どこにもここにも、たいへんなよろこびが、大水のようにあふれました。三頭の牛のおなかに、小がもやにわとりをつめたまま、丸焼にしたものを、市場のまん中にもちだして、たれでも、ひと切れずつ、切つてとっていけるようにしました。噴水からは、とびきり上等のぶどう酒がふきだしていました。パン屋で一シリングの堅パンひとつ買うと、大きなビスケットを六つ、しかも乾^{ほし}ぶどうのはいったのを、お景物^{けいぶつ}にくれました。

晩になると、町じゅうあかりがつけました。兵隊はどんどん祝砲を放しますし、男の子たちはかんしゃく玉をぱんぱんいわせました。お城では、のんだり、たべたり、祝杯をぶつけあったり、はねまわったり、紳士も、うつくしい令嬢たちも、組になって、ダンスをして、そのうたう歌が遠方まできこえて来ました。

ダンス輪おどり大すきな

みんなきれいなむすめたち、

まわるよまわるよ糸車。

くるりくるりと踊り子むすめ、

おどれよ、はねろよ、いつまでも、
くつのかかとのぬけるまで。

さて、ご婚礼はすませたものの、お姫さまは、まだ、もとの魔法つかいのままでしたから、ヨハンネスをまるでなんともおもっていませんでした。そこで、旅なかまは心配して、れいのはくちょうのつばさから三本のはねをぬきとって、それと、ほんのちよつぴり、くすりの水を入れた小びんをヨハンネスにさずけました。そうして、おしえていうのには、水をいっぱいみたした大きなたらいを、お姫さまの寝台のまえにおく、お姫さまが、知らずに寝台へ上がるところを、うしろからちよいと突けばお姫さまは水のなかにおちる。たらいの水には、前もって、三本の羽をうかして、くすりの水を二、三滴たらしめておいて、その水に三どまで、お姫さまをつけて、さて、引き上げると、魔法の力がきれいにはなれて、それからは、ヨハンネスをだいじにおもうようになるだろうというのです。

ヨハンネスは、おしえられたとおりにしました。王女は水に落ちたとき、きやつとたかかさげび声を立てたとおもうと、ほのおのような目をした、大きな、黒いはくちょうのような、おさえられている手の下で、ばさばさやりました。二どめに、水からでてくると、

黒いはくちようはもう白くなつていて、首のまわりに、黒い輪が、二つ三つのこつているだけでした。ヨハンネスは、心をこめて神さまにお祈りをささげながら、三ど、はくちように水をあびせました。そのとたん、はくちようはうつくしいお姫さまにかわりました。お姫さまは、まえよりもなおなおうつくしくなつて、きれいな目にいっぱい涙をうかべながら、魔法をといてくれたお礼をのべました。

その次の朝、老王さまは、御殿じゅうの役人のこらずをひきつれて出ておいでになりました。そこで、お祝をいいにくるひとたちが、その日はおそくまで、あとからあとからつづきました。いちばんおしまいに来たのは、旅なかまでしたが、もうすっかり旅じたくで、つえをついて、はいのうをしよつていました。ヨハンネスは、その顔を見ると、なんどもなんどもほおずりして、もうどうか旅なんかしないで、このままここにいてください。こんなしあわせな身分になつたのも、もとはみんなあなたのおかげなのだからといいました。けれども、旅なかまは、かぶりをふつて、でも、あくまでやさしい、人なつこいちようしでいいました。

「いいや、いいや、わたしのかえつていく時が来たのだ。わたしはほんの借をかえしただけだ。きみはおぼえていますか、いつか、わるものどものためにひどいはずかしめを受け

ようとした死人のことを。あのとききみは、持っていたものこらず、わるものどもにや
つて、その死人をしずかに墓のなかに休ませてくれましたね。その死人が、わたしなので
すよ。」

こういふがはやいか、旅なかまの姿は消えました。

さて、ご婚礼のおいわいは、まるひと月もつづきました。ヨハンネスと王女とは、もう
おたがいに、心のそこから好きあつていました。老王さまは、もう毎日、たのしい日を送
つておいでになりました。かわいらしいお孫さんたちを、かわるがわるおひぎの上にのせ
て、かつてにはねまわらせたり、しゃくをおもちやにしてあそばせたりなさいました。ヨ
ハンネスはかわりに、王さまになつて、王国のこらずおさめることになりました。



青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

旅なかま REJSEKAMMERATEN

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>